

令和 2 年 6 月 22 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K03160

研究課題名(和文)ブランデンブルク農村の市民的交流圏形成に関する研究

研究課題名(英文)Research on the Making of the Civil Society in the Brandenburgian Rural Area

研究代表者

山崎 彰(Yamazaki, Akira)

山形大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：30191258

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ブランデンブルク州における農村的市民交流圏の生成と構造を、19世紀前半にまで遡って解明した。1791年にブランデンブルクでは最初の近代的農村結社「マルク経済協会」が設立されて以降、農村内で身分を超えて農業や教育に関する情報や意見の交換が行われた。プロイセン改革期には、領地や教区の境界を越えて農村学校教員会議が開催され、土地貴族や農場経営者ばかりではなく、農民たちも郡農業協会、家畜品評会や農機具展示会などの場で交流が行われた。1840年前後になると、郡などの地域レベルでも、農業協会が数多く設立され、これには農民たちも参加した。これらについて、文書館史料にもとづき、明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

16～18世紀のブランデンブルク農村に関しては、歴史人類学や歴史人口学的手法も利用しながら詳細な社会史研究の成果があるが、19世紀前半のブランデンブルク農村に関してはドイツ民主共和国時代の農業史研究を超える業績が現れなかった。ようやくRene Schillerによって農村エリートのプロソポグラフィ研究が公表され、貴族などエリート層の社会交流の実態が明らかになる一方、Monika Wienfortの農村市民層の研究は、農村内における市民的交流圏に関しても言及し、その重要性を指摘している。本研究はこれらを受けて、農村内の市民社会的関係生成のプロセス全体を解明した。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research is to consider how the public sphere have formed in the rural society in the Province Brandenburg with the emphasis on its function and structure. "Die Maerkische Oekonomische Gesellschaft", established in 1791, as the first agricultural society in Brandenburg took the lead in exchanging information and ideas about new methods of farming and stock raising between ambitious landlords and farmers. At the Era of the Prussian Reforms, many schoolteachers conferences were instituted for the purpose of improving the public education and raising the status of teachers. Thereafter many agrarian societies were established about 1830's and 1840's to introduce the advantages of agricultural reforms not only to the landed elites and the farm managers, but also to the common peasantry.

研究分野：西洋史(近代ドイツ史)

キーワード：市民的公共圏 農村社会 ブランデンブルク 農業協会 学校教員会議

1. 研究開始当初の背景

1) ドイツにおけるブランデンブルク農村史研究

16～18世紀のブランデンブルク農村に関しては、Jan Peters や Hartmut Harnisch, Lieselott Enders が歴史人類学や歴史人口学的な手法も利用しながら詳細な社会史研究の成果を1980～90年代に公刊した。近年ではHeinrich Kaakがブランデンブルク・オーデル地方の社会紛争に関して2冊の大著(2010, 2012年)を刊行し、またTakashi Iida(飯田恭)がルピン地方の社会史研究の成果を刊行した(2010年)。

これに対して19世紀前半のブランデンブルク農村に関してはドイツ民主共和国時代の農業史研究を超える業績が現れなかったが、ようやくRené Schillerによって農村エリートのプロソポグラフィ研究が公表(2003年)され、貴族などエリート層の社会交流の実態が明らかになる一方、Monika Wienfortの農村市民層(領地裁判官、聖職者)の研究(2001年)は、農村内における市民的交流圏に関しても言及し、その重要性を指摘している。さらにHeinrich Kaakは、意見や知識の交換において、貴族と市民農場経営者の間で交わされる書簡の意義を強調している(2013年)。しかし農村内の市民社会的関係生成のプロセス全体の解明にまでには至っていない。

2) 日本における農村市民社会研究

日本におけるドイツ農村史研究では農業史研究に中心があり、農村における市民社会的関係を扱った研究は多くない。南ドイツを対象とした竹中亨の研究(1996年)やボヘミアを対象とした桐生裕子の著書(2012年)は農業団体とその政治的・社会的活動を扱ったものとして優れているが、19世紀後半以降を対象としており、農村市民社会の発生過程(18世紀～19世紀前半)に関しては解明が及んでいない。

2. 研究の目的

本研究は、プロイセン王国・ブランデンブルク州における農村的市民交流圏の生成と構造を、19世紀前半にまで遡って解明することを目的としている。1791年にブランデンブルクでは最初の近代的農村結社「マルク経済協会」が設立されて以降、農村内で身分を超えて農業や教育に関する情報や意見の交換が行われた。プロイセン改革期には、領地や教区の境界を越えて農村学校教員会議が開催され、土地貴族や農場経営者ばかりではなく、農民たちも郡農業協会、家畜品評会や農機具展示会などの場で交流が行われた。さらに、1840年前後になると、郡などの地域レベルでも、農業協会が数多く設立され、これには農民たちも参加するようになる。これらが全体として連動しながら、市民的交流圏が形成されてゆくが、このプロセスについては、日本でもドイツの学界でも本格的な研究はない。本研究は、文書館所蔵史料にもとづきながらこれらを解明し、従来のプロイセン史像(=ユンカーと権威主義的国家の社会支配)の修正を目指す。

3. 研究の方法

本研究の中心になる史料は、ブランデンブルク州立中央文書館(BLHA)と枢密プロイセン文化財団文書館(GtAPK)が所蔵する手稿史料、農業協会等が刊行した機関誌、公刊史

料である。ブランデンブルクの地域農業協会や教員団体の史料は、主に両文書館での調査において収集した。本研究では、ブランデンブルク全般の状況を考慮しつつ、農法改革、学校教員会議、農業協会等が特に活発に展開したクーネルスドルフ、メークリン、フリーデルスドルフがあったオーデル地方について特に集中的に検討した。

4 . 研究の成果

1) 18・19 世紀交の都市 = 農村的公共圏

農業協会(landwirtschaftliche Vereine)は、18 世紀後半から 19 世紀前半にかけて農村における「公共圏」を具現する組織として決定的に重要である。この団体は農業技術の開発と普及の過程を、明確な組織的活動によって加速させた。農業協会の前身組織は「郷土協会」「公益協会」「経済協会」などとも呼ばれ、18 世紀にはヨーロッパ各地で設立された。ブランデンブルクでもかかる団体として「マルク経済協会」(Die Märkische Ökonomische Gesellschaft)が、ポツダム市に 1791 年に設立された。創設当初は、年次総会における研究発表や意見交換と定期刊行物の発行が、協会の中心的な活動であった。マルク経済協会は、ブランデンブルク農村社会に影響を与えた最初の市民的協会である。

なるほど団体原理自体は「市民的協会」といえるが、マルク経済協会の場合、農村を活動舞台としているだけに、指導者には土地貴族とともに聖職者が目立った。ただし 19 世紀に入ってプロイセン改革期を迎えるならば、メークリンにおけるテア(Albrecht Daniel Thaer)の農業アカデミーが農法改革の指導的な組織として確立し、ここではまさに市民出身の農場経営者が運営を担った。アルプレヒト・テアのメークリン実験農場とフリードラント夫人(Frau von Friedland 本名 Charlotte Helene von Lestwitz)の領地クーネルスドルフが位置するオーデル地方が、ベルリン(プロイセン・アカデミー)やポツダム(マルク経済協会)とともに、農法改革をめぐる「公共圏」の中心となったことに注目したい。この 2 つの農場を中心に、オーデル地方では、農業や学校教育に関する情報交換の場が、御領地役人、小作人、土地貴族、聖職者の間で形成されていた。農法や学術、教育論議の場としてフリードラント夫人のサロンが生まれた。ついでテアの実験農場と農業アカデミーが設立されたことで、オーデル地方はドイツ語圏における新農法開発や学校改革の拠点へと成長していったことが明らかになった。

2) 農村学校改革をめぐる公共圏

ブランデンブルク上級宗務・学校審議官(Oberkonsistorial- und Schulrat)のナトルプ(Bernhard Christoph Ludwig Natorp)は、フンボルトによって 1809 年 5 月にブランデンブルク州政庁に招聘され、8 月 3 日に上記官職に任命されると、改革意欲のある聖職者のネットワークを作り出していった。彼は一方で聖職者を通じて学校の現状を報告させ、他方で彼らの力を借り、領地の壁を越えて、各地域に聖職者と学校教員の社会関係を張りめぐらし、これを通じて教員の教育力と社会的な地位を高めつつ、学校改革を実現しようとしたのである。具体的にはブランデンブルクの各地に教員会議(Schullehrerkonferenzen)を設置させ、教育に関する意見交換と相互教育の場とした。教員会議は聖職者と教員の意見交換の場にとどまるのではなく、教員の補習教育課程や読書サークルが併設され、この運動の中から教員養成機関としてのゼミナール(Lehrerseminare)が、聖職者の指導によりブランデンブルクの各地に生ま

れた。ナトルプの計算によるならば、1812年11月には71もの教員会議が設置され、これに750~800人の教員が参加しており、また1814年には200人以上の教員が補習教育を受講していた。教員たちには農村手工業者など低身分の出身者が多く、これまで聖職者の下で教会番(Küster)を兼務することに甘んじていた。このような教員たちが自らの地位向上を求め、1810年代初頭のブランデンブルクに鬱勃として登場した教員団体に、情熱をもって参加した。ナトルプは彼らの地位向上への野心を、公共圏を通じて取り込むことに成功したといえる。

ナトルプを支えた聖職者の中にノイマンがいた。彼はフランクフルト市近郊の村ロッセウ(Lossow)の牧師職をつとめるかたわら、フリーデルスドルフもこれに属するフランクフルト学校管区の視学官をつとめていた。彼は、自らの管区の学校事情の把握に努め、学校教育の改善とともに、教員の能力向上に力を注ぎ、ナトルプの信頼を勝ち得ていた。1811年11月3日付けで、ナトルプはブランデンブルクの学校管区毎の教員会議の状況をまとめているが、これによるとフリーデルスドルフ領などが属するフランクフルト学校管区では、視学官のノイマンも含めて、合計7人の聖職者が中心となって学校会議(Schullehrerkonferenz)と教員研修コース(Schullehrerschule)を開催していた。この7名の聖職者はノイマンの全体的な指導下で、それぞれの教区と隣接教区の村落学校教員たちを集めていた。7名の聖職者のうち3名が共同で教員会議を運営していたが、他の4名はそれぞれ独力で教員会議を設置していた。教員会議は聖職者の全体的な指導下にあったとはいえ、教員の中からも代表者が選ばれていた。毎週の定期的に行われ、授業や学校経営に関する知識や経験を交換しあった。さらに教員会議毎に、定例の会議とは別に、教員研修コースが設置され、約1ヶ月間、毎日6時間ほどかけて研修が行われた。授業科目毎の教育方法改善が主目的とされ、聖職者が講師を務めていた。またフランクフルト学校管区の教員会議では、1810年にノイマンがロッセウで教員研修コースを開催したのを皮切りに、7名全員が1811年に5つの研修コースを実施していた。1811年だけで合計66名(教員58名、教員候補生8名)が、研修に参加している。

3)地方農業協会の設立

こうして19世紀初頭には、市民的交流圏は土地貴族や聖職者を越えて学校教師をも巻きこみ始めたのだが、農民層にまで影響を持つには時間がかかった。しかし1840年頃になると、ブランデンブルクで数多くの農業結社が設立され、これには農民たちも関与するようになる。これまでブランデンブルクではマルク経済協会が唯一の会員制の農業団体であったが、しかし1830年代後半に農業好況が到来すると、農法改革への期待が土地貴族や市民的農場経営者ばかりではなく、農民たちをも捉えるようになる。これによって1840年前後には、突然のように各地域に農業協会が設立され始めた。これ以前には領主や農場経営者、聖職者など、貴族と市民に参加者が限られていたのと比較し、この時の農業協会の活動には農民たちも熱心に参加していた。加えてオーデル地方には農民の協会も設立されている。なにゆえに、農業結社に農村住民たちが積極的に参加し始めたのか。18世紀末のマルク経済協会の活動は、初代会長のロッセウの影響もあって、農村学校の改革や民衆向け雑誌の刊行を通じて、民衆啓蒙に力を入れていた。これらの活動が数十年を経て実を結んだ可能性も否定はできないが、むしろこの時期に農業結社が家畜の品評会や競馬、農具の展示会などを盛

んに催し、農業技術の伝達と交流のための開放的な場を設けたことが、階層を超えて広い影響力を持ちえたことの原因であったのではないか。

1843年時点でブランデンブルク州では33の農業協会が活動していた。その特徴として、以下をあげうる。これらの中では18世紀に設立した「マルク経済協会」のように長い活動の歴史を持つものもあったが、圧倒的に多かったのは1840年前後に設立されたばかりの団体であり、28団体が43年の時点で10年未満の活動歴しか持たなかった。第2に、団体の形態は郡単位の総合的な農業団体として設立されたものが多かったが、馬飼育や果樹などの特定部門に特化した団体も見られた。第3に、地域的にはブランデンブルク各地に農業団体の創設が見られたとはいえ、全体としては東部に多く、特にオーデル地方には農民を主な組合員として組織する結社が多く見られた。その典型が、フリーデルスドルフの隣町 Seelow 市に創設された「レブス郡農民・市民土地所有者農業総合協会」(Landwirtschaftlicher Gesamt-Verein der bäuerlichen und städtischen Grundbesitzer des Lebuser Kreises)である。この協会は、郡に8つの支部を持ち、202人の組合員を持っていたとされている。年会費も通常の協会が年1~2ターレルであるのに対し、この協会は15グロシェン(0.5ターレル)に抑えられ、農民たちの参加を促していた。穀作の他に、果樹や森林経営、養蚕を組み合わせ、複合的な経営を農民たちに奨励していた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Akira YAMAZAKI	4. 巻 67
2. 論文標題 Die Gutsherrschaft Friedersdorf und die Melioration des Oderbruchs	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Jahrbuch für Brandenburgische Landesgeschichte	6. 最初と最後の頁 163-184
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山崎彰	4. 巻 85-3
2. 論文標題 ブランデンブルク農村社会における社会紛争と土地所有権 レカーン領の農民とビュドナーを事例に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会経済史学	6. 最初と最後の頁 3-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----